

6月になったというのに、函館市内近郊はインフルエンザB型の流行が続いています。インフルエンザB型は症状が軽く、熱が下がれば学校にと考える方も多いようですが、熱が下がってもウイルスをばら撒くのは発病してから5～7日間とされています。インフルエンザの流行を止めるためには、ひとりひとりの家庭で、インフルエンザに罹ったときはしっかり休むという心構えが一番大切です。

小児科にたずさわるものの戒めとして、「何もしないのが一番の治療」という言葉があります。「こどもは自然治癒力が旺盛なので、基本的には何もしないでも自然と治っていくものだ。医者はどうしても苦しいとか辛いという症状に最小限度の薬を出して、あとはこどもが治っていく力を邪魔しないように、あえて薬を出さないことも必要で、それがこどもをみる大前提だ」というということです。

鼻水の薬の代表的なものに抗ヒスタミン薬というものがあります。小児科で使う薬の中では大変ポピュラーなお薬ですが、一部の薬では喘息がひどいお子さんに使うと痰を固くしてますます喘息がひどくなり、肺炎になってしまうことが知られています。また、眠気が強かったり、熱が高いときに飲むと熱性痙攣を誘発したりと言われているものがあります。昨年1月にアメリカの食品医薬品局(FDA)は、2歳未満の幼児に市販の風邪薬としょうされるものを飲ませないようにと警告を出し、それらの薬で風邪が治ることはないと発表しました。私のところにも、市販の薬を飲んだけどかえって悪化したというお子さんが時々いらっしゃいます。カルテをめくってみると、前にゼロゼロとした痰が絡むような咳をしていたというのがほとんどのようです。

症状が出たら、何かしてあげたいというのは親としてはよくわかります。でも、時にはあえて何もしないことがこどもには一番の薬であるというのもわかってください。小児科はいつもこんなことを考えながら、この子にあった一番の最低限の薬を見つけるために日々診療を行っています。